公益社団法人　国土地理協会

2021 年度学術研究助成

研究成果報告書

外来音楽の地域資源化から捉える音楽と地域の関係性

研究代表者　坂本優紀（東京都立大学）

Ⅰ　はじめに

近年，地域活性化の方策の一つとして音楽イベントが全国各地で開催されている。その主たる目的は集客による経済効果であることが多いが，地域に与える影響は経済分野だけに留まらないと推察される。音楽を文化の一つとして捉えると，イベントが開催される地域文化に影響を与える可能性が考えられるものの，音楽と地域の関係を検討した研究は少ない。そこで本研究では，これまで経験的に理解されながらも実証的に検討されてこなかった音楽と地域の関係を，住民の活動による音楽の地域資源化[1)]に着目して検討することを目的とする。

そこで，まず研究対象としての音楽を理解する必要があるが，その際参考となるのがスモール（2011）が提示した「ミュージッキング」である。ミュージッキングは用語の通り，名詞である音楽を動詞に変化させ，音楽の実践的ダイナミクスを捉えようとする概念である。その背景には，音楽を自律的産物として制作者に依存するモノとして扱っていたことに対する問題意識がある（中村 2010）。そのためミュージッキングは，音楽を作品やコンテクストとしてではなく，実践される場の「活動」や「出来事」として理解することを求める。そこでは，音楽実践が制作のような直接的実践から拡張され，音楽的営為のすべてが含意される。具体的には，演奏や聴取はもとより，演奏会におけるチケットのもぎり，楽器の運搬やチューニング，さらに清掃員までをも取り込もうとする考えである（スモール 2011：31-35）。また，これらの音楽に関わる全ての人々が作り出す関係性も対象とすることが特徴である。近年の音楽を取巻く環境の変化とミュージッキングのような視点は，研究対象を音楽とそれに関わる主体や社会へと広げ（山田 2003：24-25），人文社会学系の研究分野が音楽へと接近する試みが図られている（たとえば櫻井 1995；東谷 2003 など）。今日の研究では音楽をめぐる主体の多様な実践と関係を動的に明らかにすることが重要であり，多角的なアプローチが求められているといえる（毛利 2017）。

次いで音楽実践について整理すると，音楽を現代的な意味での「音を楽しむ」行為とするならば，音楽実践は個人的行為となる。それは同じ音楽に対しても音楽実践者の背景や思想，聴取経験の差異により関係性が異なるためである（山田 2003：20-21）。そのため，どのジャンルやアーティスト，地域や国の音楽を実践の対象とするかは個人的嗜好に依存する。特に現代は，グローバル市場での評価が強い影響力を有していることが特徴として挙げられる。

しかし，音楽実践は個人的感覚だけに依拠するものではなく，社会的文脈の影響も受ける。南田（2001）はロックを対象に，社会階層や年齢等と結びつきながらカウンターカルチャーの一翼として拡散し，その過程で正しいロックなるものとしてアウトサイドな表現や振る舞いが指向されたことを示した。音楽を選択する行為が社会的な立ち位置を表明するとともに，音楽に付与された真正とされる行動が要求されることとなった。こうした事例を踏まえると，音楽と実践者の関係は純粋に音やリズムだけで繋がっているのではなく，実践が社会的文脈の中で評価されると考えられる（南田 1998）。

また，集団での音楽実践は実践者同士を結合させたり，あるいは集団的アイデンティティを表現したりする手段となり得る。特に後者では，民族アイデンティティと交錯した実践が特徴的にみられる。たとえば輪島（2000）と粟谷（2008：135-150）は，それぞれカナダとブラジルにおけるカリブ海地域のディアスポラに着目し，カーニヴァルでの音楽実践によるアイデンティティ表出と文化創出を明らかにした。これらの事例に関しては，居住地における抑圧や民族アイデンティティの模索が活動の背景にあったと説明される。こうした人々が民族的アイデンティティの表現として音楽を実践することは，カーニヴァルという限られた時間ではあるものの，居住地域の再編とホスト社会への存在表明に繋がる。また，こうした音楽実践は実践者のアイデンティティを再構築する働きを有することも明らかにされている。

一方，ポピュラー音楽の台頭や技術発展は音楽実践の幅を拡張させており，実践者の音楽選択の多様性と流動性に着目する新たな研究も模索されている（Prior 2013）。近年の音楽実践の多様化は，たとえば，永井（2006，2016）がロックフェスを対象に，音楽を媒介としながらもそれだけに囚われない聴衆の姿として，イベント性を希求する様相を明らかにしており，新たな実践者の特徴を示していると考えられる。また，ライブハウスでの音楽実践を明らかにした宮入（2008：96-131）では，演奏者と聴衆という固定化した関係が流動的に変化することで，音楽空間が多様化する様子を報告した。今日の変化する音楽にともなう実践者の多様化は，ミュージッキングでスモールが想定した以上に拡張され，実践によってその姿を捉えていく必要があるといえよう。

これらの音楽に関する一連の研究からも示されるように，音楽は自律的な産物として社会や文化から独立しているのではなく，多彩な実践により構築されるイベントとして存在する。そうした観点を含むと，音楽と地域の関係も同様に構築的な関係，すなわち，音楽にアプリオリな地域性や地域に元から内在する音楽を求めることは難しいと考えられる。当然ながら音楽にはそれぞれルーツとなるような存在はあるものの，音楽と地域に本質的な関係を想定するよりも，実践の中で創造され改変されていく存在として解釈するほうがより音楽の理解が深まる（森 2008）。そのため本稿ではこの視点から音楽と地域の関係を検討していく。

本稿の研究方法は以下のとおりである。本稿では音楽イベントを対象として，イベント開始の動機が異なる二地域の事例を調査する。事例地域では以下の手順に沿って調査を進める。まず，音楽の地域資源化を解明するため，①音楽イベントの開催経緯把握と②住民による音楽の地域的有用性の発見プロセスを検討する。次に，住民主体での音楽の活用状況を解明するため，③イベントに関わる住民の取組みの把握，④イベント時以外に観察される取組みや地域内での活用状況を明らかにする。上記①～④の調査では，主催者，行政職員，地域住民への聞取りやアンケート，また文献資料やメディアの報道資料を活用する。

研究対象地域は，外来音楽に関するイベントが長期間開催されている地域を選定する。一

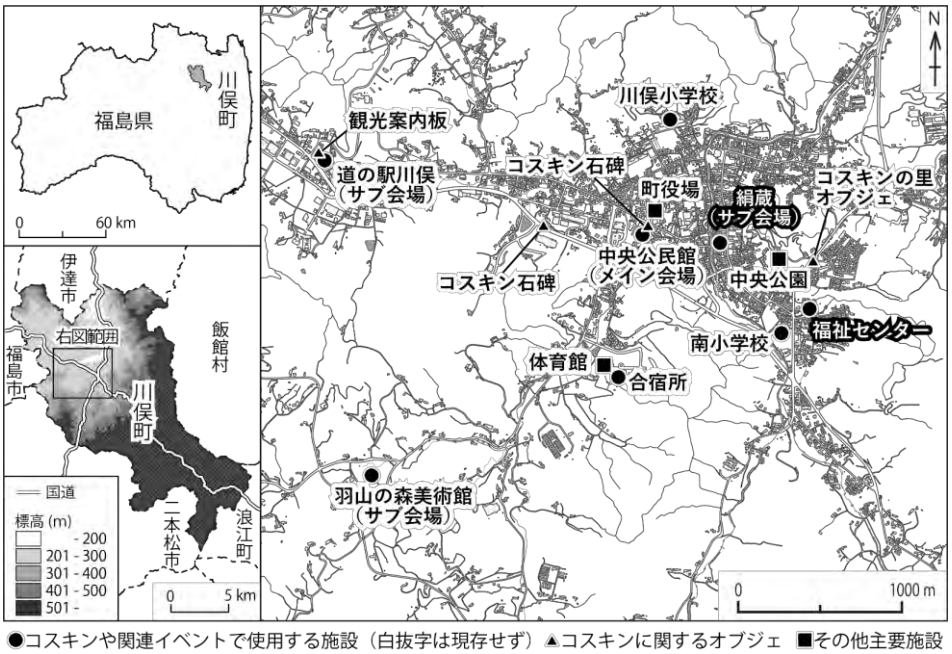

図１　川俣町の概要図
中縮尺の地図の「国道」は川俣町内を通る国道に限定して示している
（坂本（2022）より転載）

つ目の事例は福島県川俣町で，演奏者が自らの発表機会や交流を目的としてイベントを開催した演奏者主導型である。もう一つが，富山県南砺市福野で，住民が地域活性化を目的にイベントを開催し，開始当初から音楽に地域資源としての機能を期待していた地域住民主導型である。これら目的の異なるイベントを通した音楽の地域資源化を調査することで，音楽と地域の関係を多様な視点で検討することが可能となる。

Ⅱ　演奏者主導型イベントによる音楽受容

１．対象地域およびイベントの概要

本章の対象地は，福島県伊達郡川俣町である（図１）。川俣町は福島県の北部，福島市の南東部に位置する，人口およそ 1.45 万（2015 年現在）の町である。阿武隈高地の北部丘陵地帯にあり，町内一帯が起伏に富んだ地形となっている。町役場を中心とした川俣盆地に，およそ半数の人口が居住している。

本章で対象とする音楽イベントは「コスキン・エン・ハポン（Cosquín en Japon）」である（写真１）。コスキン・エン・ハポン（以下，コスキン）

写真１　コスキンの様子
（2022 年 10 月　坂本撮影）

は「日本のコスキン」を意味し，アルゼンチン・コルドバ州コスキン市で毎年１月に開催される大規模なフォルクローレ音楽祭の Festival Nacional de Folklore de Cosquín（コスキン・フォルクローレ全国フェスティバル）にちなんで命名された。コスキンは川俣町で開催されている日本最大級のフォルクローレイベントであり，国内の演奏者のみならず，フォルクローレの本場ボリビアやペルー，アルゼンチンからもゲスト演奏者が来日する。

第１回コスキンは 1975 年 10 月 18 日，川俣町福祉センターにて 18 時から開催された。開催地として川俣町が選出された正確な理由は不明であるものの，主催者 N 氏が川俣町での開催を熱望した様子が第１回コスキンのプログラムに掲載されていることから，N 氏の意向と実現可能性の観点から決定されたと考えられる。第１回のコスキンは，近隣の宮城県や山形県の他に，東京都，千葉県，新潟県，愛知県，福岡県から 13 組 48 名が演奏者として参加した。演奏会および芋煮会を通し関係者以外の町民の参加は少なく，あくまでもフォルクローレ愛好家による愛好家のためのイベントであり，その方針は現在も引き継がれている。

一方，コスキンは音楽を実践しない住民，特に教員や保護者にとっては必ずしも好ましいイベントではなかった。主催者への聞取りによると，コスキンの開催日は小中学校で児童生徒らに注意喚起がなされ，コスキン会場に近づかないよう保護者が会場付近の見回りをしたそうである。

コスキンは保護者や教員からの反発があったものの，参加団体の増加に伴い規模が拡大していった。コスキン発展の系譜を遡ると，まず大きな転換点として会場の移転が挙げられる（表１）。1975 年の第１回から六年間は小規模な福祉センターで開催されていたが，町の

表１　川俣町のフォルクローレに関する年表

年	コスキンの出来事	町内	外部評価	備考
1975	初開催			
1980		川俣インカス結成		
1981	中央公民館への会場変更			
1982			コスキン'82のテレビ放映	
1983		訪問団派遣	ふるさと紹介ラジオ番組放送	
1984		国内の爾人留学生招待		
1986	会期延長（２日間）	アミーゴ川俣初出場	NHK東北ふるさと賞	
1988	駐日大使，福島県知事初参加			
1989	コスキン市首長招待			
1990			県文化振興基金顕彰者賞	
1993			サントリー地域文化賞	
1996			みんゆう県民大賞	
1997		小学校でケーナの授業開始	自治大臣表彰	
1999	プレ・コスキン開始	訪問団派遣・パレード開始		
2000		コスキンのオブジェ設置	県文化功労者知事表彰	
2001			地域文化功労者文部科学大臣表彰	
2002	会期延長（３日間）			
2003			地域づくり総務大臣表彰	
2006		訪問団派遣		
2011	チャリティーコンサート（東京）		地域再生大賞優秀賞 サントリー地域文化賞特別賞 ふくしんこども応援賞	東日本大震災
2019	台風19号のため中止			
2020	オンライン・コスキン開催			COVID-19 流行

（コスキン30周年記念事業記念誌部会編（2005），コスキン40周年記念事業記念誌部会編（2015），聞取り調査により作成）

（坂本（2022）より転載）

中央公民館建設に伴い 1981 年より会場が変更された。これにより，中央公民館に併設されたホールでの開催が可能となり，コスキンの規模拡大に繋がった。また，それまでの市街地外れの会場から，市街地の中央公民館へ移転したことにより，行政がコスキンに関与し始めるようになった。行政はイベント当日の会場設営・運営などの補助だけでなく，1983 年にはアルゼンチンへの訪問団派遣や日本に滞在しているアルゼンチン留学生の招待など，コスキンに留まらない多面的な取組みを展開していった。

国内のフォルクローレ関係者にとってコスキンが重要な役割を担うようになったのが，1999 年の第 25 回から開始されたプレ・コスキンである。プレ・コスキンは，Festival Nacional de Folklore de Cosquín に日本代表として出場する演奏者を選出するコンテストとして位置づけられる。これは 1999 年 1 月に同フェスティバルに川俣町から訪問団を派遣し，現地のイベント関係者と交流したことで実現した。プレ・コスキンの認定は，個人的な模倣イベントから世界的イベントに付随するローカルイベントの一つへと，コスキンの地位を向上させる役割を果たしたと考えられる。その他，開催回数が重なるにつれ外部から様々な表彰を受けたこともコスキンを町内外に周知させる契機となった。外部からの評価は，コスキンが個人的なイベントから脱却し，地域を代表するイベントへ発展するきっかけとなっただけでなく，住民がコスキンを理解し受容していく素地を作ったと考えられる。

コスキンの規模が拡大するに伴い，コスキンやフォルクローレと川俣町との関係が変化していった。第 8 回（1982 年）や第 10 回（1984 年）のコスキンのプログラムをみると，フォルクローレと川俣町を積極的に関連づけようとする主催者の文章や双方が分離できない存在として多くの参加者に認識されていることが読み取れる。また，コスキンのプログラムには町長からのコメントも毎年掲載されており，行政からの視線も時系列で理解することができる。行政の大きな転換期は第 7 回（1981 年）にみられる。第 7 回のコスキンのプログラムではコスキンは町の名誉とされ，川俣町は「日本のフォルクローレのメッカ，あこがれの地」であると記されている。こうしたことから，1980 年代初頭にはコスキンの開催される川俣町がフォルクローレの聖地として，主催者や行政によって構築されるとともに，実践者へと認識が拡散されていったと考えられる。

2．音楽の地域浸透

1）若年層の参加

コスキンに対しては当初，音楽を実践しない多くの住民は興味を示さず，また保護者や教員は否定的な態度であった。しかし，コスキンの規模拡大に伴い，一部の住民，特に若年層がフォルクローレやイベントに関心を示し始めた。1980 年に住民による最初のフォルクローレ演奏グループ「川俣インカス」が結成された。川俣インカスは，コスキンの主催者 N 氏がフォルクローレの楽しさを広めるために初めて開催したケーナ教室の受講生グループであり，メンバーは小学生から高校生までの若年層であった。同年の第 6 回コスキンのプログラムには町長が「この春ごろより街中からケーナの奏でるメロディーが聞こえる」と記述している。物理的に聞こえたか定かではないが，川俣インカスの結成はフォルクローレが町に

浸透していくきっかけの一つであったと考えられる。以降，1982 年にはケーナ教室第二期生グループ，翌年には第三期生グループが誕生し，コスキンに出場している。1984 年には川俣小学校 6 年 1 組の発表をはじめ，合計 5 組の住民グループの出場が確認できた。

主催者への聞取りによると，特に大きな影響を与えたグループとして「アミーゴ・デ・川俣（以下，アミーゴ川俣)」が挙げられる。アミーゴ川俣は，小・中・高校生によるグループであり，先述の川俣インカスの後身として 1986 年にコスキンに初めて出場している。川俣インカスやアミーゴ川俣は若年層のグループであるため，活動には保護者の理解が不可欠である。当時は若年層のフォルクローレグループが珍しく，町外のイベントからも出演オファーがきたことで，日常の練習だけでなく，出演に関わるサポートも必要となった。こうしたことにより，後に保護者によるアミーゴ川俣の後援会が結成された。

他にも，行政職員への聞取りによると，1997 年からは町内にある五つの小学校の 4 年生の総合学習の時間にフォルクローレの演奏が取り入れられ，現在も毎年 6 月からケーナの講習が実施されている。行政がコスキン事務局の担当者に講師を依頼する形式で実施しており，毎年およそ 100 本のケーナが小学生に配布される。小学生がフォルクローレに取り組むようになったことで，町では日常的にフォルクローレが聞かれるようになった。この取り組みを通して地域の大人達にコスキンやフォルクローレへの理解が浸透していった。

以上から，1980 年代，若年層はコスキン主催者が町に持ち込んだフォルクローレを地域に広げ，保護者をはじめとした地域の大人の理解を深める役割を担っていたと考えられる。1990 年代後半に行政がフォルクローレを地域学習の教材として利用したことは，当時，若年層の実践を通し地域と音楽が結びつき始めていたことを示している。そして，学校でのフォルクローレの実践は，さらに地域全体へと音楽を広げ，川俣町とフォルクローレを結びつけることに寄与した。こうした一連の流れの中で，若年層の実践は地域と音楽を仲介する役割を果たしていたといえよう。

2）住民の音楽実践

第 25 回コスキンが開催された 1999 年から，聚渓會（しゅうけいかい）を中心にコスキン・パレードが始まった。聚渓會は，地域活性化を目的とし 1998 年に町内の自営業者により結成された団体である。地域活性化方策の模索時に，会員が Festival Nacional de Folklore de Cosquín 訪問団の一員としてアルゼンチンを訪れ，そこで実施されていたパレードから着想を得たことで始まった。川俣町でのパレードはコスキン一日目の午前中に実施され，町に拠点を置く団体ごとに隊列を組み，毎年およそ 1,200 人が参加する[2)]。2019 年は台風により中止となったが，聚渓會の参加予定者集計資料によると，参加予定団体は学校や幼稚園等の教育に関わる団体，福祉施設団体，金融業や建設業等の企業団体，議会や役場等の行政団体，ライオンズクラブやロータリークラブ等の社会奉仕団体，フォルクローレに関わる団体，その他の団体の 7 つに分類できる。また同集計資料によると最も参加者が多いのは教育に関わる団体で，児童生徒と保護者合わせて 734 人が参加する予定であった。

コスキン・パレードは南小学校の校庭を出発し，北側にある川俣小学校校庭までの約

1.7km を 2 時間かけ練り歩く（図 2）。例外として 2004 年の第 30 回コスキンの際には南小学校から市街地を通り，川俣中学校と町役場前を通り中央公民館までの約 2.2km を歩く予定であったが，雨天のため中止となった。町の中心部を２時間車両通行止めにして実施するパレードは，町内にとっても大規模なイベントの一つといえる。パレードではフォルクローレの曲「花祭り」を流しながら，各団体が踊ったり，演奏したりしながら進む。また，所定の場所では立ち止まって演奏や踊りを披露したりもする。

パレードの参加者は色とりどりの中南米の民族服を模した衣装を着用する。多くの衣装は聚渓會の会員による手作りであり，参加者はそれを貸与される。繊維産業が残る川俣町では，カラフルな生地は業者からの提供によって賄え，縫製は会員の技術により低コストで大量の衣装が作成できたという[3)]。現在は毎年同じものを使用しながら，適宜，修復や新調して枚数を維持している。

コスキン・パレードは町全体で捉えると，賑やかな様子を作り出し町の活力を象徴するイベントになっている。他方，団体や個人においては，これまで練習した演奏やパフォーマンスを披露する場としての役割を有していると考えられる。

コスキンやパレードは年一回のイベントであるが，町内にはイベント時以外でもコスキンに関するオブジェや案内板，土産物等がある。最も大きいオブジェは，2000 年に国道 114 号線の福島市との町境付近に設置された「コスキンの町川俣」の文字と，ポンチョを着てケーナを持つ子どもの像である（写真２）。また，2005 年にも類似した像が，中央公園入口の道路脇に設置された。両像の設置主体は川俣ライオンズクラブであり，パレードにより活気づいてきた町を盛り上げようと，当時の会長が提案した。また，会

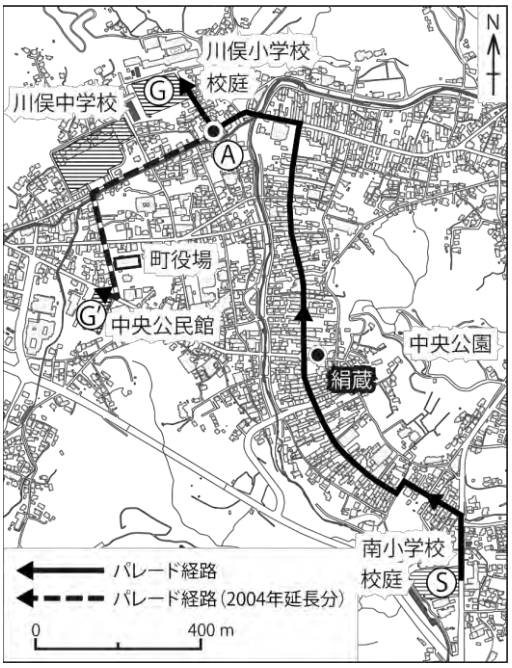

図２　コスキン・パレード経路
パレードは南小学校（S）を出発後，A 地点から北上し川俣小学校校庭（G）が終点となる。2004 年のみ S 地点を出発後，A 地点から破線の経路を通り中央公民館（G'）が終点となった。絹蔵は現存しない。
（聚渓會新聞により作成）
（坂本（2022）より転載）

写真２　コスキンのオブジェ
（2019 年 4 月　坂本撮影）

場となる中央公民館の中にはコスキンに関わる楽器や表彰状，ケーナ教室の様子をまとめた広報ポスター等の展示物があり，外には石碑が設置されている。その他，道の駅川俣の観光案内板には，ポンチョを着て楽器を演奏する人物が描かれていたり，土産物として「コスキンサブレ」や「銘菓かわまたコスキン」などの洋菓子が数店舗で製造販売されていたりと，町内の至る所にコスキンに関する展示・陳列がみられる。こうした景観は通年でコスキンを町内に表現しており，町内外にコスキンやフォルクローレと地域を結び付ける役割を果たしていると考えられる。

３．パレード参加者の意識

パレード参加者のコスキンとパレードに対する意識を把握することを目的に，アンケート調査を実施した。アンケート調査では年齢，居住地，パレード参加回数，演奏者としてのコスキン参加の有無と観客としての聴取の有無，パレードの参加目的や参加後の意識変化等，11 項目を質問した。調査票の配布は 2019 年 11 月に，聚渓會会長と共に町内のパレードに参加している 7 団体の代表者に依頼し，各団体から所属する参加経験者に配布してもらうことにした[4)]。またそれ以外の 2 団体には，聚渓會会長を通して依頼し，同様に調査票を配布してもらうことにした。調査票の回答は自記式とし，回答者には記入済みの調査票を各団体に提出してもらい，それを各団体から聚渓會会長に返送してもらった。その結果，9 団体から 71 人の回答を得た。パレードに参加する 30 団体のうち，教育関係団体とフォルクローレに直接関係しない団体とがあわせて 15 団体あり，本稿ではそれらを除く 15 団体のうち 9 団体に調査を実施したことになる。調査団体は，奉仕活動団体が 2 団体 13 人，行政関係が 2 団体 8 人，商工会・企業が 2 団体 22 人，福祉施設が 3 団体 28 人である。なお，本アンケート調査だけでパレード参加者全体の意識を明らかにすることは難しいが，児童生徒を除く参加者の傾向を把握することは可能である。

以下では質問した項目の半数以上に回答のなかった 3 人を除いた 68 人分の回答を分析する。まず回答者の属性をみると，年齢別では 40 代と 50 代が多く，居住地別では町内が約 7 割を占める。次に参加回数をみると，年齢に比例して多くなり，10 回以上の参加経験者は 40 代以上で 6 人となる。一方，20 代では 1 人以外が参加回数 1 回となっている。中央公民館での演奏ステージの聴取では「経験有り」が 30 人 (44%),「経験無し」が 38 人 (56%) である。パレード参加による意識変化の質問では，ポジティブな回答が多くみられた。具体的には，フォルクローレへの興味が増したかという質問に対し「そう思う」「ややそう思う」という回答が 32 人（47%），コスキンのステージ演奏に対し理解が深まったかの質問に対しても同様の回答が 29 人（43%）であった。また町の活気の変化に対する質問でも，「良くなったと思う」という回答が 42 人（62%）であり，「変化せず」の 15 人（22%）や「思わない」の 9 人（13%）の回答数と比較してパレードを積極的に捉えていることがわかる。

ここでさらに自由回答をみると，回答者のパレードに対する評価が理解できる（表 2）。たとえば N3，N7，N8 では町にとっての有用性が述べられており，地域活性化と町民の交流の機会となっていることが示される。一方，N1 や N6 ではパレードが国際理解のきっか

表２　パレードに対する参加者の評価

番号	年齢	居住地	参加回数	演奏会での聴取経験	パレードの評価
N1	70代	町内	20	有	国際交流　⇔　アルゼンチン
N2	30代	町内	8	無	普段きけない音色なのでとても良いと思う。年２回とかでも良いのでは？
N3	40代	町内	8	有	普段町内で見掛けない人たちが大勢パレードを見たり参加したり一時楽しい時間を共有できる。そんな時がある事をもっと知ってもらいたい。
N4	30代	町内	1	有	子供が学校の授業でコスキンを学び発表会で演奏しました。むずかしい所もみんなとても上手に演奏していて感動しました。町の文化を引き継いでいってほしいです。
N5	40代	町内	2	有	ステージ演奏とは違った魅力があり、楽しむことができると思います。
N6	40代	町内	3	有	子供たちがアルゼンチンの歴史を学んだり、楽器に触れることで地域外の人たちと新しい交流ができることはとても良いことだと思います。
N7	30代	町外	1		川俣町の高齢者も楽しんで町の行事に参加できている。町にとってなくてはならない行事となっている。
N8	50代	町外	―	無	町が一体となり活性化すると思います。

パレードの評価は原文のまま.

（アンケート調査により作成）
（坂本（2022）より転載）

けを作ったり，町外の人との交流を促進したりと，外向的側面が強調されている。また，N4 や N6 では若年層の発達におけるフォルクローレの寄与が評価されている。N2 はステージ演奏を聴取したことがないものの，パレードで聞くフォルクローレの音色を「とても良い」と評価し，他方，N5 はステージ演奏とは異なるパレードの魅力を述べていることから，参加者個人による楽しみ方の差異がみてとれる。

４．川俣町における外来音楽の受容過程

1975 年に愛好家の個人的イベントから始まったコスキンは，多様な取組みにより日本最大級のフォルクローレイベントへと発展した。ここで，町内における実践主体の増加と地域的影響を時系列で整理すると①個人催事期，②発展期，③地域資源化期の三時期に区分することができる（図３）。以下，それぞれの時期の特徴を示し，フォルクローレの受容過程とその促進契機を検討する。

１）個人催事期

コスキン開始の 1975 年から福祉センターを会場としていた 1980 年までが個人催事期である。この時期のコスキンは愛好家による手作りイベントとしての性格が強く，関係主体も町内外ともに愛好家だけであった。また保護者や教員との間にはコンフリクトが発生し，コスキンは「不良」の集団とみなされ警戒されていた。一方，N 氏が始めた住民向けのケーナ教室により，若年層を中心にフォルクローレの実践者が誕生し始めた時期でもあった。

２）発展期

コスキンの会場が中央公民館に移転した 1981 年からパレードが開始される前年の 1998 年までが発展期である。会場の移転により，市街地の縁辺部で開催されていた個人的な趣味イベントから，町の中央で開催される大規模な音楽イベントへと発展した。この時期はコスキンの演奏組数が 150 組以上まで増加し，イベントの規模が大きくなるとともに，コスキ

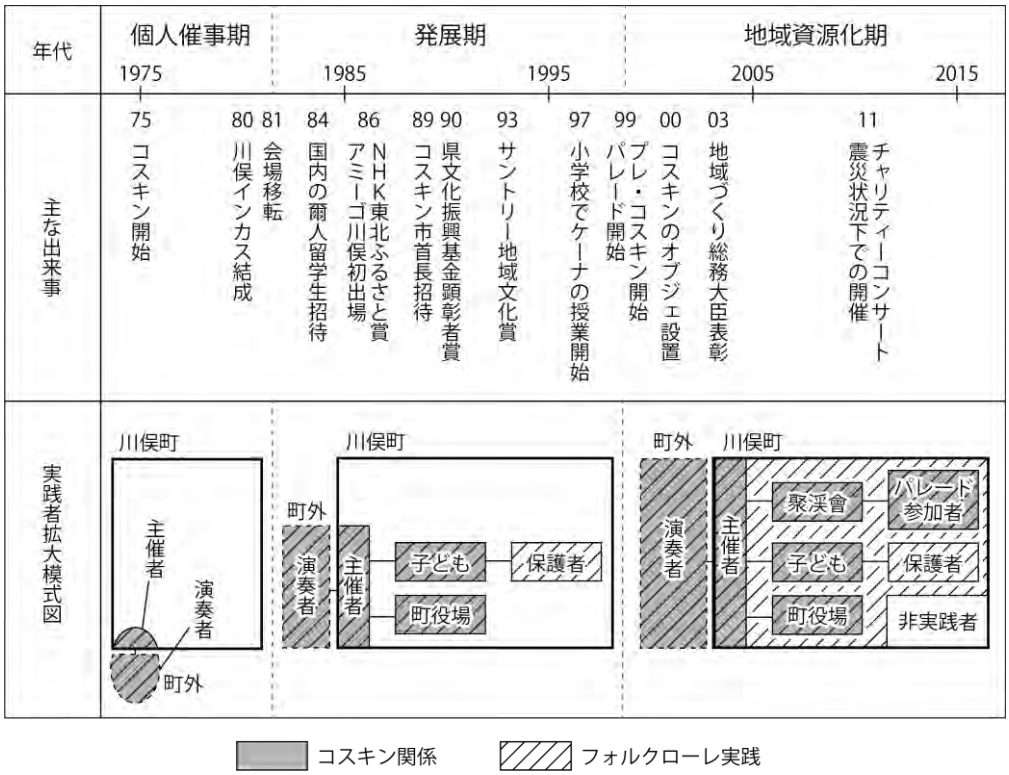

図３　川俣町におけるフォルクローレ受容背景と過程

（坂本（2022）より転載）

ンに積極的に関与し，音楽を実践する町内の若年層が増加していった。また，若年層の音楽練習とコスキンでの発表は，イベントと音楽に対する保護者の理解を促進させる結果にも繋がった。そのため，若年層の実践は，周囲の大人にコスキンやフォルクローレの理解を浸透させる媒体としての役割も担っていたと考えられる。また，1981 年以降は行政がコスキンに人的補助等で関与するようになり，個人的イベントから町のイベントへと住民の認識が徐々に変化していったと考えられる。さらに，1986 年の NHK 東北ふるさと賞を皮切りに，外部評価が高まっていく時期でもあった。こうした出来事は住民の認識を変化させ，地域内での評価を高める結果に繋がった。

すなわち，この時期は①若年層の実践による音楽の浸透，②行政が関与する公的行事へと認識の転化，③外部表彰による相対的評価の上昇が特筆すべきこととして挙げられる。これら三つの出来事は，川俣町でのコスキンやフォルクローレへの理解を深化させた。その結果，1997 年から始まる学校でのフォルクローレの地域教材化にみられるように，地域資源としての有用性が音楽に認識され始めるとともに，理解の促進がさらに進んだ。

３）地域資源化期

1999 年は聚渓會がコスキンやフォルクローレを地域づくりに活用し，パレード等に多くの住民が関与するようになり始めた時期である。ミュージッキングの概念では，音楽に直接的に関わる実践者だけでなく，その周囲に存在する音楽と間接的に関わりを有する人々も

実践者としたように，本稿でもパレード等で音楽と関わる人々を重要な音楽実践者として捉える。こうした観点から，1999 年以降は多様な実践者が登場し，音楽の実践が地域全体に拡大した時期とみなすことができることから，第三期として地域資源化期を設定する。

地域資源化期では，コスキンやフォルクローレを地域の代表イベント・音楽として解釈する新たな実践者が登場した。実践の主体は，それまで直接的に関与していなかった住民であった。こうした人々がパレードでみせた音楽実践は，演奏や聴取といった限定的な実践ではなく，音楽の背景にある他国の文化を含む実践であり，それにより地域への受容がより容易に促されたと考えられる。また，パレードによって町内の実践者が増加することで，川俣町とフォルクローレの関係がより強固に結びついた。その結果，町内では新たなオブジェの設置やお土産等，視覚的にもコスキンやフォルクローレが積極的に表出されていった。こうした様々な実践は，好循環的に地域資源としての音楽をより強化していくことに繋がった。

Ⅲ　地域住民主導型イベントの音楽受容

1．研究対象地域およびイベントの概要

本章で対象とするのは，富山県南砺市福野で開催されるワールドミュージック・イベントの「スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド（以下，スキヤキ）」である。福野は，富山県の南西に位置する南砺市の一部であり，2004 年に周辺の 8 町村と合併する前の旧福野町の範囲である（図 4 ）。スキヤキは，1991 年から開催されているワールドミュージックの音楽イベントであり，出演アーティストは世界各地から招聘される。2021 年現在，招聘されたアーティストはアフリカや中南米，ヨーロッパ，北米，オセアニア，アジア等，50 以上の国や地

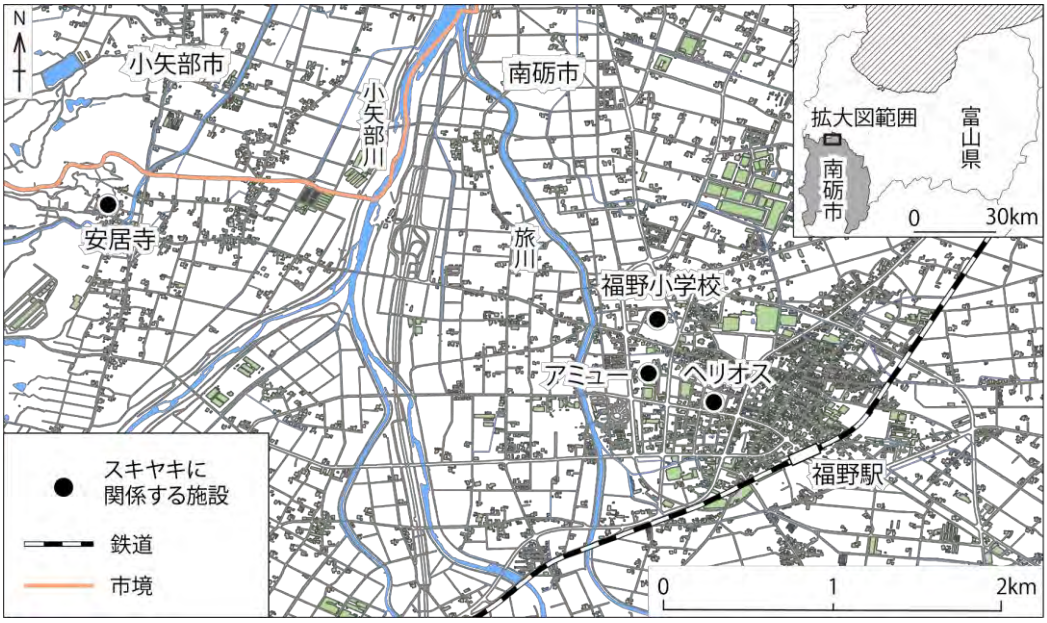

図 4　南砺市福野の概要図

域に及ぶ。また，日本国内からも多数のアーティストの参加があり，アイヌや琉球の音楽等，国内の民族的な音楽も披露される。

スキヤキが開催されるようになった契機は，メイン会場である福野文化創造センター・ヘリオス（以下，ヘリオス）の建設であった。町営の文化センターの建設にあたり，国際交流や異文化理解を目的とした独創的な利用を模索した役場職員が，当時流行の兆しをみせていたワールドミュージックのイベントを企画した。その際，運営スタッフとして地域の青年を中心に結成された組織を取り込むことで，行政と住民団体によるイベントが始まった。

第一回のイベントは 1991 年 8 月に開催され，アフリカのブルンジのアーティストを招いた。スキヤキの目的が国際交流であったことから，ステージでの演奏だけにとどまらず，地域住民との交流イベントも開催された。以降，世界各国からアーティストが来訪し，地域住民を対象とした様々な交流イベントが開催されている。

２．市民楽団の結成

スキヤキの特徴の一つに，アーティストによる音楽のワークショップがある。アーティストはスキヤキが開催される数週間前から滞在し，住民向けに楽器や歌などのワークショップを開催する。こうした取組みにより，スキヤキから 7 組の市民楽団が誕生した。本稿では，最初に誕生した「スキヤキ・スティール・オーケストラ（以下，SSO）」と小学生によるグループの「気分はカリビアン」の概要を報告する。

SSO は 1995 年にトリニダード・トバコのアーティストによる，スティール・パンのワークショップの受講生を中心に結成されたグループである。スキヤキを中心にしながらも，地域外のイベントでも演奏活動をしている。1997 年にはトリニダード・トバコで開催されるカーニヴァルにも出演をした。メンバーの多くは南砺市周辺の住民である。

SSO のカーニヴェルへの参加はメディアでも取り上げられた。これにより，福野ではスティール・パンの存在が強く認知され，福野小学校では 1997 年から学校教育の一環としてスティール・パンの演奏が取り入れられた。福野小学校では 4 ～ 6 年生が選択して実施するクラブ活動があるが，クラブの一つとしてスティール・パンを演奏する「気分はカリビアン」が結成された。気分はカリビアンは，スキヤキや他の地域イベントへの出演もするようになり，保護者が演奏を鑑賞したり，イベント参加の手伝いをしたりするなど，新たな音楽実践者を誕生させる重要な契機の一つとなった。

３．地域に広がる音楽

地域活性化を目的とするスキヤキは，商業的な住民不在の音楽イベントではなく，住民を巻き込み，住民が楽しむイベントとなることを模索していた。しかし，メイン会場のヘリオスの中で実施しているだけでは，興味のある住民しか訪れなかった。そのため，主催者はイベントを町中に展開させることで，ヘリオスを訪問しない住民の目や耳に触れる機会を増やそうと考えた。その一つが，町内を練り歩くスキヤキ・パレードである。

スキヤキ・パレードには，ワールドミュージックに関係する団体だけでなく，地域の祭り

や学校関係の団体も参加する。特に，小～高校生の学校ごとの吹奏楽団体と気分はカリビアンの出演により，保護者や祖父母をはじめとした地域の住民がパレードを見物するようになったという（写真３）。この取組みは，地域住民のワールドミュージックやイベントに対する認識を変化させる重要な契機となった。

写真３　スキヤキ・パレードの様子
（2022 年８月　坂本撮影）

４．福野における外来音楽の受容過程

1991 年から地域活性化のために始まったスキヤキは，当初から地域住民の参加が重要な目的であった。そのため，住民が関わりやすい音楽実践が展開された。ここで住民の音楽受容という観点からスキヤキの歴史をみると，３つの転換期にわけられる。

第一に 1995 年の市民楽団の結成である。市民楽団の結成は住民を音楽実践者へと転身させるとともに，楽団員の周囲の住民にスキヤキやワールドミュージックへ関心を向けさせる契機となった。また，若年層の気分はカリビアンの結成により，より幅広い年齢層の住民の参加を促した。これにより，地域を代表する音楽としてワールドミュージックが福野の住民に受容されたと考えられる。

次いで，2000 年から始まる会場の多地点化が転換期として指摘できる。会場を町内に複数展開することで，これまでイベントに参加しなかった住民の音楽聴取の機会を増加させたことは，音楽受容にとって重要な契機となった。

そして，もっとも影響が強かったのが 2009 年に開始されたスキヤキ･パレードであった。パレードで参加者および聴衆を多様化させたことはもとより，町を面的に利用することで，音楽と地域の関係がより深まったと考えられる。

以上の三つの取組みが福野におけるワールドミュージックの地域受容において，重要な出来事であったと整理できる。

Ⅳ　音楽と地域の関係：おわりにかえて

川俣町および福野における結果より，ある地域における音楽受容とは，音楽に対し地域的有用性が付与されるということとまとめられる。そこでは，音楽自体の内容やジャンルの質が問われるのではなく，地域資源としての有用性が問われる。当然ながら，たとえばロックやクラッシック音楽などそのジャンルが異なればプロセスや活用方法は異なった結果になると推察されるものの，最終的には地域に還元される役割を音楽が持たされるというのが音楽受容と考えられる。

その点において，川俣町における音楽受容は，フォルクローレが地域を代表する音楽とし

ての有用性を獲得し活用された時点，すなわち聚渓會が地域活性化の手段として利用した時点に認めることができる。一方，福野においては，イベントの最初から地域活性化の手段としてワールドミュージックを用いたものの，開始当初から地域の音楽とはなりえなかった。福野の転換点となったのは，住民の音楽実践，すなわち市民楽団の結成が最初の転機だったといえる。ただし，福野の場合は，主催者が住民へと音楽受容を促し続けたことから，川俣町のようにある特定の時点に大きな変化がみられるというよりも，音楽実践をする住民が年々増加していったことによる漸進的な音楽受容だったと考えられる。

両地域の共通点としては，パレードによる音楽の地域的展開および若年層の参加による音楽受容の促進の二点が挙げられる。まず，パレードをみると，パレードは音楽を演奏しない住民にとっても参加しやすく，一時的であるものの，広範囲で音楽とその実践者を展開することとなった。音楽が屋外で実践されること，特に住民の日常生活の場所での音楽実践は，音楽と地域を関係づける重要な出来事であったと考えられる。また，一度受容した音楽でも地域的有用性がなくなることで地域との関係が解消されると考えられることから，パレードは音楽と地域の関係を再生産する役割も同時に担っていたといえよう。両地域における音楽との関係の構築と維持には，パレードの果たした役割が大きかった。

次いで，若年層の参加による受容を検討すると，若年層は，音楽と地域の仲介的役割を担ったことが明らかとなった。川俣町と福野における若年層の実践は，大人の指導のもとで音楽と地域を結ぶ媒体として機能した。一方，こうした若年層の実践では，その受動的側面を捉えるだけでは不十分な理解となる。コスキンやスキヤキが開始された初期の頃に音楽を実践する若年層は積極的な実践者であったと考えられる。若年層の好奇心は異文化への接近を恐れず，実践は新たな文化を解釈し定着させる役割を担ったことで，その後の音楽受容に繋がったと説明できる。

そして両地域でみられた住民による音楽実践は，対外的側面として他地域との差異化を目指した活動であったとも指摘できる。すなわち，音楽を実践する住民にとって，音楽が有していた役割は，他地域との差異化における地域アイデンティティの強い醸成機能にあったと考えられる。そこでは，音楽と地域が本質的かつ直接的に関係性を有するのではなく，外部との比較によって地域を特徴づける存在として採用されたと説明できよう。

こうした音楽実践を鑑みるに，音楽は実践者による行為として成立するものであるため，音楽に本質的なローカリティや地域にアプリオリな音楽の存在を求めることはできない。すなわち，音楽と地域の関係は音楽実践者の実践によって構築されると結論づけられる。

両地域の事例はそれぞれ開催経緯や主催が異なっているものの，音楽受容プロセスの鍵となる要因については類似した結果となった。この結果をより深く検討するため，今後はさらに多くの事例を蓄積する必要がある。また，本稿の結果が音楽に特徴的にみられることなのか，あるいはその他の文化の受容プロセスで一般的にみられることなのかの検討も今後の課題である。

付記
本稿の調査にあたり，福島県川俣町および富山県南砺市福野の皆さまに多大な御協力をいただきました。また，本稿のⅠ，Ⅱ章とⅣ章の一部は坂本（2022）からの転載であり，査読者から有益なご助言をいただきました。末筆になりますが御礼申し上げます。
本稿は，公益財団法人国土地理協会 2021 年度学術研究助成を受けました。記して御礼申し上げます。

注
1）本稿では，地域資源を地域性に有用性が合わさった用語として使用する。地域資源に関する議論は坂本（2018）を参照。
2）「聚渓會新聞第 15 号」（2017 年 10 月 6 日発行）と「平成 29 年度主な事業の成果の概要（決算附属資料）」による。
3）「聚渓會新聞創刊号」（2003 年 10 月 10 日発行）による。
4）アンケート調査は，2019 年 11 月 20 日に聚渓會会長と共に 7 団体に直接訪問し，代表者を通して回答を依頼した。対象団体は聚渓會会長がパレード参加団体から選択した。各団体の回答者は，代表者の判断で回答してくれそうな人が抽出されており，所属メンバー全員に調査票が渡されてはいない。

文献
粟谷佳司 2008.『音楽空間の社会学―文化における「ユーザー」とは何か』．青弓社.
坂本優紀 2018．住民による地域のサウンドスケープの発見と活用―長野県松川村におけるスズムシを活用した地域づくりを事例に―．地理学評論 Series A 91：229-248.
坂本優紀 2022．音楽実践によるローカリティの構築―フォルクローレする川俣町―．地理学評論 Series A 95：101-122.
櫻井哲男編 1995.『二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容 1　二〇世紀の音』ドメス出版.
スモール，C．著，野澤豊一・西島千尋訳 2011.『ミュージッキング：音楽は〈行為〉である』水声社．Small, C.　1998.　Musicking: The Meanings of Performing and Listening. Middletown: Wesleyan university press.
東谷　護編 2003.『ポピュラー音楽へのまなざし―売る・読む・楽しむ』勁草書房.
永井純一 2006.〈参加〉する聴衆―フジロックフェスティバルにおけるケーススタディ―．ポピュラー音楽研究　10：96-111.
永井純一 2016.『ロックフェスの社会学：個人化社会における祝祭をめぐって』ミネルヴァ書房.
中村美亜 2010.〈音楽する〉とはどういうことか？―多文化社会における音楽文化の意義を考えるための予備的考察．東京芸術大学音楽部紀要 36：161-178.
宮入恭平 2008.『ライブハウス文化論』．青弓社.

南田勝也 1998．ロック音楽文化の構造分析―ブルデュー〈場〉の理論の応用展開―．社会学評論 49：568-583.
南田勝也 2001.『ロックミュージックの社会学』青弓社.
毛利嘉孝 2017．はじめに―ミュージッキング後に向けて．毛利嘉孝編『アフターミュージッキング―実践する音楽―』9-31．東京藝術大学出版会.
森　正人 2008.『大衆音楽史：ジャズ，ロックからヒップ・ホップまで』中公新書.
山田晴通 2003．ポピュラー音楽の複雑性．東谷　護編『ポピュラー音楽へのまなざし―売る・読む・楽しむ』3-26．勁草書房.
輪島裕介 2000．音楽による民族＝地域的「文化」の創出―ブラジル・サルヴァドールの事例から．美學 50(4)：48-59.
Prior, N.　2013．Bourdieu and the sociology of music consumption: A critical assessment of recent developments.　Sociology Compass 7：181-193.